「対話と実行」座談会（H21.2.14(土)　高知市春野地区）の概要

●知事あいさつ

　高知県の財政（平成20年度）のパンフレット、「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」及び「産業振興計画　中間取りまとめ」（以下のＵＲＬ参照）を基に説明。

（http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf
http://www.kochinet.ed.jp/kinnkyuupuranngaiyou.pdf
http://www.pref.kochi.jp/~seisui/keikaku/cstori.pdf）

●座談会

【レンタルハウス事業への支援、ショウガ加工品の取り組み、加温技術についての研究、失業者の就農への支援】

Ａさん：高知県では、レンタル事業について積極的な取り組みをされて、我々の管内でも毎年利用させていただいている。若い担い手、認定農業者等が、規模拡大などに利用させていただいていて、お礼を申し上げたいと思う。しかし、段々問題点が出てきていて、市が財政難で予算があまりないということで、少し制約が出始めている。それに対して、何かフォローができないものか。農協としても、できるだけ多く、広く利用していただくということで取り組んでいるが、特定農家の規模拡大が進んでいて、それに対して今後十分な対応ができない場面があるかもしれないと危惧している。今後、別途の形で手立てをしていく必要がありはしないかと思っている。今、若い者が一生懸命取り組んでいるが、ご承知のように、１次産業は、天気の具合や経済の問題で、値段が確定しない。非常に不安定で、いいときはいいが、悪いときは悪い。今後は、若い担い手が安定して経営ができるように、所得保障といったものを充実させていかないと、若い者が手を挙げて取り組まないのではないのではないかと思う。高知県の農業は、ＪＡグループの調査によれば、10年後にはかなり高齢化が進んで、減少していくというように、大変心配される状況にある。県内のハウス面積も約90%になるだろうと言われているし、春野町でも、95%に落ち込むというシミュレーションが出ていて、我々はこれをいかに維持するかということに取り組まなければならないと思っている。今、10年後に向けて、農協でも産業振興計画をつくっているわけだが、何とか若い担い手が元気になるお手伝いをしていきたいなと思っている。

　次に、今、ショウガが全国的にブームになってきている。日曜日の朝の番組でも、ショウガについて紹介されていたが、健康につながって、漢方薬等には必ずショウガが使われているということである。現在、高知県はショウガの日本一の産地である。ただ、今は青果として販売をする者がほとんどであるので、何とか1.5次、加工品に向けて取り組まないといけないと考えている。子どもの体力も最低クラスということであり、加工を考えて、「ショウガを食べたら元気になる」というくらいの、ジンジャー作戦を立ててやっていけばどうかなと思っている。今、「飲むショウガ」というものが売り出されているが、値段が高くて、安価になればかなり消費が増えるだろうと思うので、これは大いに今後の研究課題だと思っている。

　また、みなさんのテーブルにトマトのゼリーを置いているが、これは当農協が、ミネラルトマトを原料として取り組み、ようやく製品化にこぎつけたものである。これは、今広島県で加

工して作っているが、県外であるので、余分なコストがかかっている。県内で加工業者さんと組めれば、もっといいのではないかなと考えている。今、２つの販売先を確定していて、成功したいと頑張っているので、知事さんを筆頭にあちこちでＰＲをお願いしたいと思っている。

もう１点は、重油高騰対策ということで、ペレットやヒートポンプなどについて研究が進んでいる。しかしながら、まだコストが相当高いと思う。これをもっと安くできるように、県の技術センターなどで、研究、テストをしてもらいたいと思っている。また、私どももメーカーと一緒になって、電気を熱源とした加温方式のものを完成させ、まだ改良を続けているが、機材は我々が提供するので、技術センターなどで研究、テストをしていただき、コストが安くなる方向につなげていってもらいたいし、実際に安くできれば、補助対象にするというようなことまでできればと思っている。

今、農業が見直される時期とも言われている。しかし、一つちょっと腹が立っているのは、景気のいいときは、農村から他の産業に労働力が移り、不景気になったら、労働者の受け皿は農業であると言われることである。しかし、そう簡単に失業者が農業に取り組んで、できるわけではない。土地も必要であるし、ハウスをするならばハウスがいる。それなりの援助の体制が整わないと、なかなか受け入れにくいなと思う。また、失業者対策で一つ気になっているのは、今、農家で中国の研修生を受け入れているが、外国人を受け入れながら、今度は国内の失業者を救わないといけないということになって、研修制度をやめるのかという問題もある。また、今後、23 年まで国が補助金などを手当てして、失業者を雇用するという方向になってきていると思うが、そういうものとの絡み合いをどうするのかという問題も出てくると思う。今、高知市長さんは、春野と合併をして、農業の産出額がナンバーワンになったと非常に喜んでくださっている。財政的な問題もあるとは思うが、農業振興については、市もきちんと我々の方を向いてやっていただきたい。

知事：最後の失業者対策の話について、他の産業界の人たちが、自分たちが厳しくなったから人を農業に押しつけたというふうにとらえると、腹が立つと思う。しかし、担い手不足が深刻だという状況で、新たな担い手をつくるというふうに考えていけば、また、違った見方もできてくるのではないかと思う。特に、高知出身で都会に出て行っている方であれば、是非帰ってきていただいて、農業に就いていただければと思う。ＪＡの会長さんとお話をさせていただく中で、本当に頭を抱えるのは、全体の人の数が減っていく中で、どうしても農業の産出額が減っていくという絵を描かざるを得ない。１人当たりの所得を増やせないかと考えておられるということであったが、できれば、産出額も増えればいいと思う。しかし、おっしゃるとおりで、そんなに簡単なことではないのはよく分かっている。農業の技術が難しいということと、土地を用意しないといけないということがある。また、就業後の最初の段階での手当てが必要だと思う。最初に、若い方々が取り組んでいるけれども、値が不安定であり、安定して経営ができるための方策をというお話があった。そして、レンタルハウス事業の問題点についてのお話もあった。これらのお話は表裏一体なのかもしれないが、新たに就農される方々に対して、例えば、研修についてしっかり援助するということ、また、もっと暮らせる金額の研修費を出していかないといけないのではないか、今の金額では足りなさすぎないかとも考えている。さらに、研修を受け入れてくれた方々に対して補償していくということも考えないといけないと思って

いる。レンタルハウス事業についても、資材の高騰を踏まえたときに、その実態に合っていないのではないかという問題意識を持っている。担い手確保について力を入れたいと思っているが、おっしゃったとおりで、そんなに簡単なことではない。しかし、高知県にとって農業は本当に大切なものであるので、先々のために大切にしていくという観点からも、県は予算的な面を含め、もう少し汗をかかないといけないのではないかという思いである。21 年度から制度の見直しを検討しているので、そういう形で進めていきたいと思っている。

ショウガのお話もあったが、できるだけ県内で加工できるようにしたいと考えている。なので、食品加工について、あるいは、地産外商について専門で担当する課を県庁の中にもつくろうと思っている。そういう課が他の部と一緒に取り組みを進める中で、県内での仕事のマッチングを促進していく機能を果たしていきたいと思っている。よい相手方を知らなくて、出会えなくてということもあると思う。出会うことができれば、それを契機にやってみようかという人も出てこられるかもしれない。最初はゆっくりしか動き始めないかもしれないが、何もやらなかったら変わらないので、そういう取り組みを進めたいと思っている。

最後に、ヒートポンプなどのお話であるが、こういうものを技術センターなどでテストをしないといけないと思う。乾燥の度合いによって、病気になる危険性があるということもあると思うし、コストの面で見合うかどうか、排出されるものがどうかなど、次世代の技術として、研究開発を重ねないといけないと思う。

【レンタルハウス事業への支援、木質バイオマスボイラー導入への助成】

Bさん：私は春野町でハウス園芸をしている。Aさんのお話と重なる部分もあると思うが、まずレンタルハウス事業について、春野地区は利用者が多い。産業振興計画の３ページの人口の推移を見ると、15 歳から 39 歳の人がすごく少ない。今、施設園芸については、世代がちょうど一巡して、２代目が担っていこうとしている方と、施設園芸は産業としては無理ではないかという判断でやめていく方とに分かれていると思う。この２代目の施設園芸を担っていく世代が、どう変わっていけるか、どういった規模でやっていくか、今までどおり作って売るだけで本当に生活が成り立つかということを考えないといけないときがきていると思う。いかに産業を拡大して、しっかりした産業にしていくかが、２代目にかかっていると思うが、そこで県がサポートしていくことによって、高知の施設園芸もいい方向に向かっていくのではないか、また、全国的に農業従事者が減っていく中、チャンスとしてとらえて２代目がやっていけば、かなりいい方向にいくのではないかと私は思っている。その辺りをサポートしていただきたい。

次に、ハウスの加温のことについて、この前、ＮＨＫの番組で、木質バイオマスの取り組みの特集をやっていた。高知県の森林が油田になるといういい話をしていた。私も、県民の１人として、そちらに移行していくつもりはある。コストが重油換算でキロ 40 円、50 円くらいに必ずなるといった方向性が見えてくれば、積極的に取り入れていきたいと思うので、県もそういった設備を導入する方には、助成をしていってほしい。

知事：レンタルハウス事業については、先ほど申し上げたとおり、担い手対策、後を継いでいかれるという意味においても、規模拡大の面から見ても、基礎の基礎となる政策だと思っている。引き続き、高知市さんにもご協力を賜らないといけないが、要件の緩和も含めて、より一層の

施策を考えている。

木質ペレットの話は、確かにこれがうまく回ると本当にいい。産業振興計画の中で、木質バイオもみんなで連携して取り組む課題として取り上げているが、今おっしゃったように、利用側のコストの問題をどう解決していくかという話もあるし、山側としても、すべての木をペレットだけにして売るのだと採算が取れない。一番いいのは、用材は用材で売って、端材の部分をペレットにして売るという供給ができれば、値段も下がるし、林家も収入が上がって、安定供給できるようになると思う。まだ、あと一歩、二歩の取り組みが必要である。全体としての仕組みづくりが重要だが、今までは、どちらかと言うと、バイオの取り組みはそれぞれの地域でそれぞればらばらにやられているようなところがあった。ボイラーについても、いくつも規格があるという状況になっているのはご存知のとおりだと思う。いかに統一的な施策にしていくかということを今考えているところである。

【加工についての取り組み】

Ｃさん：春野で花苗とショウガを作っている生産者である。花苗の方は、10 年くらい前から育種という、花を自分で作るということに気づいて、パンジー、ビオラのオリジナル品種を作って、県内を含め、東京、大阪、九州で売っている。それと、クローバーについて、５年くらい前から開発をずっと続けて、今、いろいろな色合いの四つ葉のクローバーを作ることに成功している。それを加工して、おみやげもの屋さんに置けないだろうかということで、今取り組みを始めたところである。

また、私は元々は野菜農家で、ショウガを 20 年以上作っている。これだけ高知県にショウガがあるのに、ショウガに関したおみやげが少ない。なので、ショウガの開発もいろいろ考えていて、ショウガの漬物やショウガのお菓子、ふりかけもできるのではないか、もっともっとやるべきじゃないかなと考えている。あと、私はお酒とショウガの組み合わせを考えていて、インターネットで調べると、大分県で１件引っかかってきた。よく見てみると、四万十のショウガを使ったお酒ということで、これでは高知県はだめだなと思った。焼酎にショウガ汁を搾るということはよくあるし、日本酒とショウガも合うので是非開発してほしいと思っている。

知事：高知県ではショウガがたくさん取れて、かつ、高知県のものは品質がものすごく高い。これを売り物にしたらというのは本当に夢がある話で、是非進めたいと思う。産業振興計画の検討委員会の中で、加工の話になったときに、東京の委員さんがいきなり「ショウガは夢があります」、「本物のショウガで作った本当のジンジャーエールは、本当においしいんですよ。そういうものの開発は是非されたらいいです」とおっしゃった。この方は、地域おこしにすごくお詳しく、全国を飛び回っておられる方であり、ショウガを活かした加工品づくりは、本当に取り組んでいくべき対象だと思う。今、大分県の事例をおっしゃったが、似たような話が他にもいくらでもある。高知産ユズを使った本物のジュースと銘打たれたものの製造者が他県の業者である。加工で付加価値を付けて、原料の 10 倍くらいの値段にして売っていく、１が 10 になる、その間の９の部分を県外の人に持っていかれているのではないかと思う。今はなかなかそういう取り組みがないので、現状では仕方がないが、今後は、できる限り加工も地産地消で行っていける体制づくりに向けて、県も一生懸命汗をかかないといけないと思っているところで

ある。

【都会から高知県へ、１次産業の後継者対策、高齢者のための施設】

Dさん：商工会のDと申します。商売人は、今の経済状況の中で、会員、役職員一同が、生き残りを図るため必死で頑張っている。私は水産加工業をしているが、原料が捕れなくなっていて、県外に発送したいと思っても、それだけの量を確保することができないという状況である。会員企業にとっても、客単価が下がると同時に、お客さんも少なくなっている。５年前からいうと、お客さんも半分くらいに減っている。売上げが本当に少なくなって、一体どうやって経営をしていったらいいのかなと考えている。そうすると、知事さんから説明があったように、人に来ていただく、県外からお客さんに来ていただくためにはどうしたらいいかということになる。私、考えたのは、今、都会に失業者がたくさん増えているが、高知県に森林の手入れに来ていただくことができないか。高知県に滞在をしていただければ、高知県のおいしいものも食べていただけるし、それが、高知県の消費につながる。

また、先ほどのお話にもあったが、１次産業従事者の所得を上げ、１次産業の後継者を育てていってほしい。良いものはより一層高額で売ることができるような体制づくりをしていってほしい。１次産業があって、２次産業、３次産業が育つわけなので、１次産業に後継者が育つように、また、それと同じように商売をしている人の後継者が育つように、県の方で考えていただきたい。また、高知市の方でも考えていただきたいなと思う。

そして、春野では高齢者がすごく増えていて、いかに春野で高齢者の方たちに長生きをしていただけるかということが課題となっている。春野は、最高の自然環境の中にあるので、高齢者のためのいろいろな施設を考えていただければ、県外からもその施設に来ていただけるのではないか。

知事：産業振興計画には２つの特徴があって、１点目は、１次産業は高知県のリーディング産業だと打ち出しているということである。もちろん観光も商工業も大切であるが、１次産業を基軸にして強みを伸ばしていこう、その関連を育てていこうという発想を鮮明にしている。もう１点は、今まで県がつくった計画は、ほとんどが、いかに効率的に作るか、いかに効率的に捕るかというものであった。今回の計画は、それに加えて、いかに高く売るか、いかに所得を伸ばすかということに力を入れているつもりである。地産外商、販促への支援と申し上げているのも、そういう発想があるからである。いかに値を上げて売っていくかということが大切で、それゆえに、農業では、まとまっていかないと高い値がつかないという話をさせていただいているし、漁業でも、いかに有利販売していくか、魚価を上げていくかということを課題にさせていただいている。そして、素材勝負だけだと都市圏でも似たことをやり始めているので厳しくなってくる。加工によって付加価値を付けて、厳しい市場の中に割り込んでいく力をつける、そういう企画の支援も、やっていかないといけないと思っている。今、厳しい状況になっているからこそ、県が全面的にバックアップしていく体制をとらないといけない時期ではないかなということで、計画づくりをさせていただいている。

県外から森林の手入れに来ていただくということだが、間伐については難しいところがあって、切っていい木とだめな木があるそうである。うかつな切り方をすると、もめたりすること

もあるので、人がついていてやらないといけない。ただ、おっしゃるとおり、森を重視して、ここに人にいかに来てもらうかという体制づくりは、重要だと思う。協働の森事業というものをやっていて、協定を結ぶと、その会社の人に来ていただいて、間伐体験をしてもらうといったことをしている。これは、観光の固定客をつかまえるのと同様の効果もあるので、是非進めていっていただければと思う。

高齢者の施設については、来年度、あったかふれあいセンターという新しい高知型の施設を県内に10か所つくろうと思っている。そういう形で新しい取り組みに踏み出していく。

【家庭教育、高校入試、小中一貫教育、県立春野総合運動公園の活用、これからの農業戦略、高齢者のための交通機関の整備、鍼灸治療と医科の併用禁止、介護予防運動指導員の研修】

Eさん：一県民として、夢を交えて話をさせてもらうと、まず大切なのは３点あると思う。教育、産業、福祉の３つではないか。冒頭に知事さんがおっしゃったことをすべてやっていただければ高知は良くなると思う。言うとしたら、知事が実現するまで辞めないでほしいという１点に尽きるが、教育について言えば、学校教育の前に、家庭教育が半分崩壊しているのではないか。なので、いじめが起こったり、家庭内での虐待で起こったりするのだと思う。次に、学力の問題であるが、高知県は、小学校までは割合成績がいいが、中学校になって格段に悪くなる。県は、南高校、南中学で、中高一貫教育を行っているが、中学校で勉強についていけない状況で高校にストレートに上がらせることには問題がある。試験がないと余計勉強しなくなるのではないかと危惧している。勉強は積み重ねであるので、一つ分からなくなれば、次も分からない。そういうことを考えれば、横浜が先駆けてやっているが、小中一貫教育のモデル校も必要ではないかという気がする。また、社会教育について、春野には県立運動公園があるが、利用料が高いなどのいろいろな問題があって、本当に活用しきれているのか不明である。社会教育に貢献し、あるいはそこでお金が落ちるような状況はつくれているのか。そういうところをもう少し見直す必要があるのではないかと思う。せっかくの施設が宝の持ち腐れになっているのではないかと感じる。

産業については、春野を見ても休耕地や休耕田が目立っており、後継者不足の問題がある。個人経営で、設備投資が大きいので、先ほどもそういう悩みのお話があった。それに補助していくのはなかなか大変なことで、成功例に学ぶとしたら馬路村のように加工して売るということだと思う。結局は、法人格というか、まとまって農業をやっていく、戦略的に農業を進めていくことがこれからの課題ではないかと思う。そして、農業で食べることができるというところまでもっていく。また、県内での地域の連携にとどまらずに、四国４県でやるとか、他県との連携が必要だと思う。あとは、いわゆるハネ物は、県内で消費をしていく。商品価値の少ないものは他県に出ないので、県立高校の食堂や県立の施設などで地消で支えていくという、捨てる製品を作らずに、お金にかえていく工夫が必要かなと思う。また、Ｃさんもおっしゃっていた新しい商品開発については、魅力のあるものを率先して作ってもらいたい。以前、稲で花粉症を治すということがマスコミで取り上げられたが、花粉症に効く稲を、高知大学農学部、あるいは医学部を中心に研究できれば、かなりのセールスにつながっていくのではないか。あるものを売っていくのではなくて、戦略的に作って買わせていく方法を是非研究していただきたい。

福祉については、まず、医療も含めてであるが、産業とも関係する部分は、交通機関についてである。高知県は全国トップの高齢県であり、高齢者の交通事故も問題になってきている。そういう部分も改善していくために、地域の交通網の整備が必要だと思う。現在は、それが既存のバス、電車などでまかなえないという状況がある。市営バスなどができないという状況があれば、企業と提携する、例えばデイサービスや病院の送迎バスなどと提携して、もっと高齢者の足を確保していくということが必要ではないかなと思う。

また、介護療養型病床の廃止があって、介護が必要な人の受け皿をどうするのかという問題があるが、介護されないお年寄りをつくることが第一である。医療費削減、介護費削減には、元気なお年寄りをどんどんつくることしかない。そういうことを考えると、医療だけを見ていてもだめである。医療現場を取り巻いているものをうまく活用する。骨つぎは、骨折、脱臼、打撲、捻挫、挫傷という、いわゆる新鮮例を扱う。はり、灸で、保険扱いの対象になっているのは、腰痛症、神経痛、リュウマチなどの疾患である。そういう運動器系の慢性疾患が寝たきりにつながっていくという現状は大きい。なので、医療の分野と医療を取り巻く分野の連携を県がもっと進めていくということが大切である。ネックになっているのは、医科との併用治療ができない、はり、灸の療養費の扱いもあるが、国がだめだからだめだという紋切型ではなくて、高知県にはどういうような施策が合っているのかということをもっと研究してもらいたい。最後に、介護予防運動指導員の育成を進めているが、各業界だけでは財政的にも厳しい部分がある。それを、看護師とか、理学療法士とか、鍼灸師とか、マッサージ師とか、いろいろな分野を県がとりまとめて、そういう研修も率先して行っていくというような方向性も見つけていただきたい。

知事：最初に、親御さんの教育も含めて、いわば家庭教育をいかに充実させていくか。特に、小さい子どもさんがいる親御さんたちの、いわゆる親育ち支援を重要視しなければいけない。子どもをかわいがることができない親御さんなども増えたりしている中で、子どもとの関わり方を、幼稚園などともタイアップしながらいかに教えていくかという課題に力を入れていこうと思っている。より一般的な放課後の対策については、まず習慣づけするために、一定程度、学校側ももっと深く踏み込んでいくというか、放課後の補習といった取り組みも必要ではないかなと思っている。何を勉強すればいいか分からないということが一番多いのではないか。教材をしっかり開発して普及させることと、それをやる場を構えていくというこの２点を大切にしたいと思う。

小学校から中学校で一気に落ちるという話であるが、そのとおりで、小学校は大体全国平均並で、中学校になると落ちる。しかも中学校入学時は全国平均並なのに、２年生の頭になると、いきなり全国 46 位くらいまでに落ちているというのが今の高知の現状である。中学１年生の最初の基礎の段階でつまずくから、以降が全く分からなくなってしまう。これを１個、１個単元ごとにしっかり確認させる対策を取らないといけないと思う。もう一つ、高知県では、事実上、ほとんど試験を受けなくても高校に通るようになっている。名前を書いて、基礎的なすごく簡単な問題が解けると通る。事実上、学力検査が十分できるような状況になっていない。これを 22 年の入試から変えて、前期選抜試験は、基本的に学力テストによって選抜をすることにする。しかも、この割合を８割まで増やしていく。他方、学区制はできるだけ早く撤廃をしていくこ

とで、勉強をすれば、行きたい学校に行けるという方向にしようとしている。子どもに酷なようであるが、中学生の段階で、自分の進路に向けて一定の努力をするということは、ある意味大切なことで、本当の意味の愛情だと思う。再チャレンジができなくするようなことはしないが、一定の厳しさは必要だと思っている。

小中一貫教育については、研究したことがないので、研究させていただきたいと思う。確かに、小中の連携は必要で、中学校で勉強が分からない原因は大抵小学校にあるという話もよくされるので、事実上、中学校で小学校の補習をしないといけないのではないかという話もしている。

春野の県立運動公園の話については、きちんと活用するように話をしたいと思う。

農業の話については、まとまって戦略的に進めていくことが大事で、その先に、加工もあることが大事だというお話だと思う。まとまりある産地づくりと、もう一つ、加工の問題についても、生産者団体の方々も含めて、広がりが出てくることが大切だと思っている。全体として加工で付加価値を付けていくから、その加工のために作物を作っていくという形に発展していってこそ、本当の意味で広がりがあって、産業として成長していくのだろうと思っている。なので、産業振興計画では、この広がりを狙って、初めからＪＡさんや園芸連さんなどともタイアップして、計画づくりをさせていただいている。生産者団体の方とタイアップすることで、先々に大きくなっていく、いわゆる戦略性を持たせるということにつなげていきたいと思う。

交通網の整備については全く同感で、この交通問題を専担する理事を設けて、課も１個増やそうと思っている。インフラの整備も待たなければならないが、他方で、今あるインフラの中で、どこまでうまく交通システムを回せるかということも重要な課題だと思うので、それについて考えていきたい。産業振興のためにいかに大きな交通網を整備するか、例えば、フェリーを何とかもってくることができないかということもある。また、中山間地域では特にそうであるが、地域地域で集荷をしていくシステムを考えたい。もう一つは、暮らしの足としての交通の整備をどうするか。中山間地域になればなるほど、買い物をする、病院に行くということに、軽トラ１台が重要な役割を果たしたりしている。こういうことをよくよく考えていくような仕組みづくりをしたいと思う。

最後の、医療とはり、灸の問題や研修の問題については、今すぐ分からないので、調べさせていただきたいと思う。いただいたご意見については承った。

～休憩～

【春野防災ネットワーク会の取り組み】

Ｆさん：春野防災ネットワーク会のＦです。地域支援企画員の紹介があったが、春野においても、防災、あるいは他の団体において非常にお世話になっていて、フルに活動されているということで、本日、この席をお借りしてお礼申し上げたい。

春野防災ネットワーク会を結成して間もなく２年になるが、旧春野町時代に、地域の安全と財産を守るということで、町内の自治会あるいは町内会と、各地区の地域自主防災組織、53 団体を一まとめにしてネットワークがつくられた。南海地震対策や、それに備える訓練といったことを中心にやっていくということで、約 37 団体が防災に対する取り組みをやっていて、結成

率は割合高く、それに自治会、町内会がくっついて、100%の組織率となった。しかしながら、取り組みについては地域差がある。現在、我々ネットワークとして、地域に出て何とか指導をしていきたいと思っていて、春野町全体から、それぞれ地域のリーダーたちが集まって、自然災害と防犯に関して取り組みをやっていこうとしている。活動の中身については、進んでいるところと、若干遅れ気味でこれからというところもあって、いつ発生するか分からない、特に地震に対して、取り組みが進んでいないところについては、子ども会や小学校の団体にも働きかけて、子どもあるいは保護者の方から、地震や自然災害に対する認識をしてもらおうというような活動もしている。春野と一口に言っても、海岸線と中央部と山側の地域があるので、それぞれの意識、取り組みが当然異なってくる。いわゆる新興住宅地では、意識がどうしても低調であるということが言えると思うが、どこで地震に遭遇するか分からないので、広範囲での地震への対応、認識を深めていただく活動も必要ではないかと感じているところである。いずれにしても、私たち防災ネットワークで、春野全体を見つめて、いろいろな地域での防災の取り組みを進めていければと考えている。地域支援企画員さんには、春野の防災についても、非常に忙しい中ではあるがご助力をお願いしたいと思う。

知事：100%の組織率ということで、素晴らしいことだと思う。まず組織していただくこと自体が大変であり、特に春野には、正におっしゃったとおり、海の地域もあれば、山の地域も、中部も、いわゆる新しい住宅街もある。そういう中で、組織率 100%はすごいことだと思った。先ほど申し上げたとおり、自助、共助、公助で、公助も頑張るが、時間的な制約がある。また、ハードの整備にも一定の限界がある。マグニチュード８を超えるかもしれないような地震が起こるときに、全く漏れがないように対策をするということは、資金的にも無理である。そして、災害には人知が及ばないということもあって、どうしても抜けるところが出てくる。その中で起きる災害に対してどう対応するか、最後は自衛隊などが来るが、その前の段階として、共助をいかにやっていくか、すなわち防災組織の取り組みをしっかりやっていただくことがすごく重要だと思っている。まずは、100%のお取り組みについて敬意を表したいと思う。その上で、意識の問題という話をおっしゃった。防災組織自体の熟練度を上げていくということが次の課題になってくるのだろうと思う。それを上げていくための第一の前提が防災意識をいかに高めていくかということになるのだろうと思う。まだ調整をしている話ではないが、今後担当部にも投げかけてみたいと思っていることが２点あって、１点目は、子ども会に働きかけをしてということをおっしゃったが、運動会などの場で、自主防災組織の方と一緒になって防災訓練をやったりできないか。たくさんの親御さんも来ておられるであろうので、防災意識を高めていく場にできないか。特に、素直な子どもたちがそういう気持ちを持ってくれると、お父さん、お母さんも引き込んでくれるのではないかということを期待している。実は、座学は、高知県ではほぼ 100%やっている。今後求められるのは実地訓練である。実際に火が燃えている姿を見て、本当の恐さを知るということもあると思うので、そういう取り組みをもっと進められないかなと思っている。教育委員会にも投げかけてみたいと思っている。２点目が、自主防災組織の方々の練度を上げていくための支援を今後はもっと強化をしていかないといけないということである。というのは、南海地震クラスになると、生じる被害の物量が圧倒的な量になると思う。例えば、ケガ人を医療センターに搬送しなければならないといったときに、１人や２人

なら通常の救急車やヘリを使った搬送で対応できるかもしれないが、そういう方が100人も200人も出てくるということになりかねない。そうなると、通常の救急医療体制では対応できなくなるのではないか。そうなってくると、災害時の対応、例えば、医療チームが前面に出て行って、テントを張ってとりあえず治療を施して、特にひどい方について医療センターに搬送していくようなシステムづくりが必要になってくるだろうと思う。最後には、自衛隊の医療チームなどが来てくれるかもしれないが、南海地震が恐いのは、高知県だけではなくて、四国全部、近畿南部が一斉に被災するかもしれないということである。どこまで高知に援助してもらえるか分からない。地元の方々同士で、まず応急措置を施していくということから始まって、みんなで助け合っていく仕組みづくりが必要になってくると思う。圧倒的な被害物量に対してどう対応していくか、通常の手順とは違う手順をとっていかないといけないということを日々確認をし、対応策を段々向上させていく取り組みが大事だと思う。そういう訓練の積み重ね、練度を上げる取り組みを進めていきたいと思う。地域支援企画員にもご指導していただき、その内容を本庁につないでいくことで、県の施策全体にも活かしていきたいと思う。

Ｆさん：組織では、継続性の問題、組織の中に疲れが出てくるという問題がある。継続的にそういった意識を持ってもらうことが非常に大事であるが、地域差があるので、そういった意識も強めていきたいと思っている。

【知事の思う学力、教育改革の推進、学力テストの結果の公表、小中間の連携、不登校の子どもと保護者への対応、教員の増加、春野高校の休日の開放、水車の設置】

Ｇさん：春野中学校ＰＴＡのＧです。まず、知事さんは本当に学歴もすごい方なので、知事は、どういったところが学力と思っているのかをお聞きしたいというのが１点である。

先日、「さんＳＵＮ高知」の２月号を拝見したが、「良く分かってくれているのだな」という思いもしている。この中に、全国学力テストの中学生の数学の問題が載っていた。子どもとやってみたが、大人でも「あれ、これはどうだったかな？」と思う。しかし、子どもと話していたら、「ああ、そうだ、簡単な問題だ」と気がつく。この学力テストを受けたときの子どもの状態を想像すると、普段からの勉強の習慣がないので、基礎的な部分がすっぽり抜けているということがあるのだろうなと思っている。今、県が進めようとしているこの教育改革のプランは是非進めていただきたいと思っている。

次に、大阪の橋下知事なども、市町村の全国学力テストの結果を公開についてよく発言している。高知県ではどう考えているのか聞きたい。個人的には、学校間の競争力を高めるといった意味では、公表してもいいのではないかという思いもする。ただ、人間なので、差別感情など問題も出てくると思う。そういったことに配慮ができるのであれば、公表もありなのではないかと思うが、慎重に考えていただきたいと思う。

そして、先ほどＥさんの話にもあったが、小学校と中学校をくっつけるような方向性は取れないだろうか。私にも中学生の子どもがいるが、子どもが中学校に入って悩んだのが、小学校の勉強の仕方とは変わってくるということだと思う。中学校になると、確かに宿題がすごく少なくなるが、自学習というものがついてくる。その自学習のやり方が分からずに、とりあえず１ページ分、自学習ノートを書いて出せばいいだろうというような感覚でやっている。机に向

かわないよりはましだろうと思うが、それでは身にはつかないと思う。小学校６年生の３学期から中学校１年生の１学期辺りを、中学校の勉強スタイルに移行する期間といった位置付けで、この部分だけでも小中一貫で、何らかの形で情報交換、先生の行き交いというような取り組みができないかと思う。それによって、最初のスタートラインが成功すれば、中学校２年生になったときに成績も伸びてくるのではないかと思う。これは、垣根の問題ということもあるかもしれないが、同じ９年間の義務教育なので、そんなに難しい話ではないのではないかと思う。

次に、中学校で不登校の生徒が増えてきている。この子たちに、いろいろな形で学校は支援をしている。別の部屋で授業ができるような制度とか、悩みを抱えているお母さんたちが、自分たちの話をできるような話し合いの場を設けたりといったことを、学校側でもしてくれている。ただ、その場に出てきてもらえない保護者の方もいる。子どもだけではなく、保護者の方もしんどい家庭が段々増えてきている。保護者のしんどさが子どもに伝わって、子どもが勉強できないで不登校になる、またその子どもさんが親になったときに同じようなことが繰り返される可能性もあり、悪循環の一途をたどるような思いがする。何かここに施策はないのかと思っている。

また、中学校の先生の笑顔が少し足りない。職員同士でも話をしてもらいたいという思いもあるし、校長先生にも「ちょっと職員室が暗い」という話もたまにする。ただ、先生に話を聞くと、いっぱいいっぱいでもう何もできないということである。不登校の子どもなどがやっと学校に来ても、別のクラスをつくって授業をしてくれるような先生もいない。学年に１人くらい、余裕のある先生を配置してもらったら、私たちも助かるし、学校側もスムーズにいくのではないかと思う。ＰＴＡとして、先生いじめはしたくない。教え方が悪いというような先生は確かにいるが、先生も一生懸命やってくれているので、是非先生も伸びてほしいし、また子どもたちにそれが返ってくるような学校づくり、体制づくりもお願いしたいと思う。

最後に、ここには、高知市の方も、県の方もいるので、私がいつも思っている発想を申し上げたいが、春野にはあじさい街道があって、あじさいのシーズンには観光客の方がたくさん来てくれる。ただ、駐車場がなくて、車を道端に停めて、観賞してくれている。春野高校などを休みの日は開放していただいて、駐車場に充ててほしいということが１点である。もう一つ、吾南用水を使ったエコ水車を作っていただきたいと思う。普段は水車で発電した電気で青色防犯灯を設置していただき、昼間は電力会社に売って、水車の設備投資代に充てていくといったことが考えられないか。高知工科大の先生などに頼めば、低回転で高発電量のものをすぐに作ってくれるのではないかと勝手に想像したりしている。是非、そういったネットワークづくりみたいなものを教えていただいて、是非実現化していただきたい。

知事：まず、学力をどのようにとらえているかという話である。私は、「学力がいいというのは、すなわち、有名大学への進学率が上がるということであろう」とよく言われるが、全然そんなことは考えていない。私が問題にしているのは、基礎学力である。基礎学力とは、基本的には義務教育の期間に身につけておくべきことだと思うが、中学校卒業後に、自分が何かをやりたいと思い始めたときに、それに向かって進んでいけるようないろいろな力である。基本的な計算はできなければならない。日本語がしっかり読めなければいけない。また、日本語がしっかり書けなければならない。それを身につけるということである。未来に自分の力を発揮してい

くために必要な基礎の基礎となるもの、昔には読み書きそろばんと言われたものである。それがあるから次のステップに進んでいくことができる。例えば、植物が好きだから、その系統の勉強をするために進学したいと思ったときに、植物のことは大好きだが、数学がさっぱり分からないでは進学できない。そうすると、結局夢がかなわない。料理が大好きだから、調理師になりたいと思ったときに、調理師免許を取るためにはペーパーテストの関門がある。それが突破できないということではやはり夢がかなわない。自分でものを考えて、いろいろなことを学びたいと思ったときに、しっかり本が読めたりするから、次のステップに自分自身で学んで進んでいくことができる。今の学力ではそれができるだろうか。実は、国語についても問題は深刻である。中学校において、圧倒的に語彙が不足している。まだ16歳くらいであれば、自分でリカバリーするだけの時間はあるであろう。なので、実際にリカバリーして立派にやっておられる方もたくさんいらっしゃるが、他方で、絶望してしまっている若者たちもたくさんいる。「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」と書いているが、いずれ自分が学校を卒業した後に、自分の力で自立的に学べるようになるための基礎の基礎となる力ということだと思う。

学力テストの結果の公表については、私は、各市町村の教育委員会は公表した方がいいと思う。ただし、これを一律に強制することもできないと思う。というのは、公表しないというルールで行ったものであるからである。また、うかつな公表の仕方になってしまってはいけない。私は、市町村単位くらいがちょうどよくて、各学校単位までいくことはないのではないかと思っている。平均点が１点、２点違うだけ、つまり、事実上違いはないのに、こちらの学校よりあちらの学校が上ということになってしまってもいけない。市町村の単位で、深刻に反省すべきは反省するという結果を出す、それによって、危機感を共有することから物事を始めていくということはあってもいいのではないかなと思っている。ただ、高知県の場合は、小さい市町村があるので、市町村別に公表することがすなわち、それぞれの個別の学校について公表するということになりかねなかったりもする。それは地域地域ではないか。いずれにしても、無理強いをすることはできないし、我々の方で勝手に公表することもできないと思っている。おのおのの判断にお任せしたいと思う。

小中の連携の話だが、今おっしゃった、小６の３学期から中１の１学期の間だけでも連携できないかという点については、21年度からやりたいと思っている。小中一貫教育は、特に高知市などは難しいかもしれないが、小６の３学期から中１の１学期にかけての連携は極めて重要だと思う。クラスの様相も変わって、担任の先生が全部付きっ切りで教えてくれるのではなくなるということもあるし、勉強も急激に抽象化する。正夫君と和子さんがいて、リンゴを２つ、ミカンを３つとか言っていたのが、ａ＝３、ｂ＝２という形で、抽象化されていく。急激にレベルが変わるので、中１の１学期でつまずく理由の一つもそこにあるのかなと思っている。中学１年生になる段階での支援は、暮らしぶりも含めて強化をしていくこととしている。

不登校の問題で、家庭がしんどいという話は、そのとおりだと思う。先ほどから放課後対策に踏み込みたいと申し上げているのは、正にその問題意識からである。家庭にも頑張っていただきたいが、最初は、学校側から前に出て行くことではないのかなと思う。そのために、放課後対策をやろうとしている。先生の笑顔が足りないという問題にもかかわってくると思うが、放課後対策をしようとすると、より忙しくなる。この対策としてどうするかというと、教えていただく方の数を追加していくという形で対応しようと思っている。実は、学生１人当たりの

先生の数は、高知県は全国１位である。ゆえに、これ以上教える人の数を追加するのかというご批判も受けることはある。ただ、現実問題として、小学校、中学校の先生がかなり忙しいのも確かである。特に、中学校の場合は、暴力の発生件数が１番とか、不登校がワースト２位ということからも分かるように、いわゆる生活指導上の問題にかなり忙殺されているというのも事実のようである。人数が多いのだから、もっと頑張れと言うだけではちょっと現実に即していないのかなと思っている。もう一つ言えば、学力の問題が、不登校などの問題につながっている可能性も大きい。なので、担任の先生をバックアップするような形で、新たに先生方を、いわゆる補助教員というような形で入れていって、放課後対策などをやっていこうと思っているところである。

最後のあじさい街道の話はちょっとまた検討させていただきたいと思う。

【食生活改善推進協議会春野ブロックの取り組み】

Hさん：高知市食生活改善推進協議会春野ブロックのHです。去年、全国大会があってお世話になりました。私たちの協議会は昭和 54 年７月に「私たちの健康は私たちの手で」をスローガンに結成された。そして、平成 11 年に 20 周年を迎えて、記念誌の発行と健康まつりで 20mのお寿司を作った。今年７月には 30 周年を迎えることになる。平成 19 年までは、健康福祉まつりや、総合健診事業の朝食の提供、乳児健診でのおやつ、あじさいウォークでのあじさいの和菓子の提供など、住民とのつながりも濃厚に持てていたと思っているが、高知市と合併して形態が変わり、住民との関わりが大分少なくなった。寂しく感じているころに、地域支援企画員の田中さんからお話をいただいて、今は、有岡企画員と柏木企画員に本当にお世話になっている。

地産地消で郷土料理の伝承ということで、あじさいクラブを結成して、高知新聞の助成金の募集に応募して、事業を始めている。町内の特別養護老人ホームのレストランを借りて、「ふれあい食堂・味彩（あじさい）」を第１、第３土曜日に開いている。コーヒーとデザートをつけて 500 円で 100 食限定でやっているが、やっと材料費が出るくらいで、スタッフもみんなボランティアで頑張っている。スタッフは 13、14 人であるが、皆さん料理好きで、おいでくださった方の笑顔に励まされてやっている。11 時半には 100 食が完売になるくらいで、皆さんに地産地消で、地域の材料を使ってやっていることで喜ばれている。

去年の 12 月 20 日には、岡豊の歴史民俗資料館で「高知の食文化を味わう・食の心」が行われて、その日は春野の日という形にしていただいた。私たちが昼食を用意し、地元の方が地域で取れる産直市をやってくださって、後で発表されると思うが、西畑のデコ人形芝居も行われた。そのときのお品書きであるが、ごはんは、ショウガごはんと弘岡カブのかぶら寿司、焼き物として、ウナギのタタキとサトイモのおやきを作った。揚げ物として、ショウガのかき揚げとムカゴとニンジンのかき揚げ、煮物が春野のダイコンを使ったふろふきダイコン、酢の物として、弘岡カブの菊花と千枚漬け、和え物として、キュウリの白和えをして、好評だった。汁物として、春野で取れるドロメ汁、デザートは虎巻きとショウガのシャーベットも提供した。全部で２千円ということで、（値段設定が高いので）相当心配したが、皆さんおいしかったと喜んでいただいた。そんな形で地産地消を頑張っている。

知事：まず、全国食生活改善大会と全国食生活改善推進員団体連絡協議会大会、お疲れさまでし

た。あの会はすごい盛り上がりで、全国から来られた皆さんが、泊まられたホテルでおみやげ物を買っていかれたそうであるが、その会期中だけで１年分以上の売上げがあったということである。食生活について意識の高い方が、高知のものを大好きになっていただいたということで、誇らしいことだと思っている。今、いろいろ伺ったが、地産地消で高知のいろいろな食材を使う、そして素材だけではなく、食べ方を皆さんに普及させていくということは、非常に重要なお取り組みだと思う。このようなお取り組みを是非どんどん進めていただきたいと思うし、我々も敬意を表したいと思う。旅行雑誌のアンケート調査で、「地元ならではのおいしい食べ物が多かった」という項目は、高知県は 2008 年が２位、2007 年が１位である。2008 年は２位だが、カツオのタタキを始めとするいろいろなものが挙げられた全国２位で、１位と２位の差はほとんどない。これは誇らしいことである。素材が良くて、さらに、食べさせ方が非常に上手ということである。あとは食べる雰囲気が楽しいということだと思うが、これは総合力が高いということだと思う。今後、外に売っていく手段として、全部地元産のおいしい弁当という形でワンパッケージにして売っていって、魅力を高めることで、じゃあ今度実際に行ってみようかというような形につながっていくと一番いいと思う。今後のご活躍をお祈り申し上げる。

【文化の継承】

Ｉさん：西畑人形芝居保存会で事務局をしているＩです。今日はパンフレットを配っているが、表紙にある幕引き玄太を連れてきた。私は事務局で人形は使わないが、「お初にお目にかかります、幕引きをしております、玄太と申します、よろしくお願いします。今日は知事に会えるいうことで髪をセットしてきたが、決まっちゅうかのう、知事。いろいろ大変やろうが、高知のことを頼むぜよ。ほいたら、またデコ芝居を見とうせよ」（会場笑い、会場拍手）という感じである。平成８年に保存会を発足して、今年で 13 年目になるが、平成 13 年に高知市の無形民俗文化財に指定された。この西畑人形の大きな特徴は、手首についている差し金が、差し金技法と呼ばれて、ＮＨＫのひょっこりひょうたん島とか、現代人形劇に大きく影響を与えて、世界的にも高く評価をされている。このデコは、昔ながらの頭の先からわらじに至るまですべて手作りで、１体作るのに３か月かかる。人形芝居は、作る、操作をする、和楽器などの音楽、舞台美術など、全分野の総合芸術である。本当に世界に誇れる、日本人の手先の器用さが活かされる芸術である。歌舞伎の演目を中心に、義太夫語りと三味線で上演するのが、西畑人形芝居である。こうした芝居が生まれた西畑は農業が盛んで、地域の行事が多いところだったが、不況の影響などで、そうした大人の行事はすべてなくなってしまった。せめて子どもたちだけでも、力を合わせて何かをつくり上げるという喜びを知ってもらいたいと考え、毎年、地域の子ども会とともに、神社の夏祭りや地元の小学校での子ども劇の上演など、後継者育成を行っている。そうした育成の一環で、平成 11 年度から４年間、春野中学校で、人形の頭づくり、上演ということで、選択授業を行っていた。そのときのメンバー４名が保存会に入ってくれた。そうした若い力を得て、今年度から、昔ながらの移動公演を始め、演目を増やしている。こうした若いメンバーに、なぜこの西畑人形芝居をしているかと尋ねた。４名は、今高知県に帰ってきて、農業をしているが、「これから、絶対に必要なものだから」ということだった。この４名は、アメリカ留学を経験したり、県外の大学で様々な分野の勉強をしたりして帰ってきた者であるが、学習先でふるさとの自慢や、日本の文化の説明ができなかったそうで、とても情けな

い思いをした経験があるそうである。そのときに、机上の勉強以外にも必要なものがあると感じたそうである。日本は、自国の文化が本当に遠いものとなっている。そのため、日本人は、日本人として薄くなってしまっている。これからの国際社会を日本人として生きていくためには、遠くに追いやってしまった自国の文化を知り、日本人としてのアイデンティティを獲得することが必要だと考えるようになったそうである。そのように話していたメンバーの中に、昨年、20 歳の太夫が誕生した。高知県の太夫は、高知の地芝居の４団体、絵金、高野歌舞伎、八代歌舞伎、西畑人形芝居の語りを担っていくので、これからは、西畑だけでなく、様々な場所で活動していくことになる。高知の地芝居は 30 演目あり、その子が習っている竹本美園（みその）先生が、師匠から伝承するのに 20 年という歳月がかかったそうである。太夫の役割は、ただ、太棹で三味線を弾き語るだけでなく、日本の歴史や、歌舞伎の演目、舞台の全分野の勉強をしていかなければならない。文化伝承には長い時間がかかる。今、高知市や高知県には、そのような後継者育成の資金がなくて、本当に困っている。知事は、文化継承についてどのようにお考えか。

知事：私は「生物レッドデータブックという絶滅寸前の生物のリストがあって、絶滅すると大騒ぎになる。伝統文化は、継承されず途絶えてしまってなぜ大騒ぎしないのか」と言われたことがあった。おっしゃるとおりだと思った。お金がなくて、後継者育成にお金を使っていなかったということなのだろうと思うが、私もこういう文化の伝承は極めて重要だと思う。ひょっこりひょうたん島にも影響を与えているということで、こういう素晴らしい文化をどう継承していくかということだと思うが、実は、地域支援企画員は、元々、地域のにぎわいづくりということで、こういう文化の継承などについてすごく大切にしてやってきていた。私が知事になって、産業の振興も大切だということで、地域アクションプランというものに、相当深く入ってもらっていて、より実務的な仕事もしているが、こういう文化の継承などにも意を用いて、引き続き仕事をさせていただきたいと思う。そういう制度を設けていることが、こういうことが大切だと思っているということだと、ご理解をいただければと思う。知られていないのが残念だと思う。全国的に、例えば、観光客の皆さんなどにも、是非こういうものを見ていただくことで、興味を持っていただく。伝統文化についても、私は地産外商という側面があるのではないかと思っている。地元の方だけではなくて、外部の方に見ていただく。すると、メディアに取り上げられたりということも出てくるかもしれない。是非、こういうものが広がっていくといいなと思う。

【石けん使用の推進】

Ｊさん：廃油をリサイクルする方法に何があるかというと、今話題になっているバイオディーゼル、そのほかに、私がやっている石けんや、ぬかなどと混ぜて農業用の肥料にするという方法がある。私は、自分でできることは石けんだと思って、これを作り始めて 20 年近くになる。最初は、自分で作れば安上がりではないかということで始めた。ゼリー状の石けんで始めたが、容器が必要なので困ることがあって、容器のいらない固形石けんを作ろうと、いろいろな人に聞いて原形ができた。固形になってから 10 年くらいになるが、不満なところを教えてもらったり、アイデアをもったりして、改良を加えている。愛媛県の加戸知事は、大分前から、庁舎内

を全部石けんに替えていると思う。愛媛県には、石けんを広める愛媛県連絡会というものがあって、加戸知事もいろいろなことに力を注いでくれている。高知県でも、是非そういうことを考えていただきたいと思う。高知にも、18 年くらい前に、そういう石けんを作るところがあった。しかし、10 年もしないうちにおやめになったのではないかと思う。それはなぜかというと、使う人がいなかったからということである。私どもの石けんは、そんなにたくさんではないが、高知市を通じて保育園でも使っていただいている。少しでも環境のことを考えていただいて、使っていただく場を広めてほしいと思う。合成洗剤のことは、ここで言うまでもないと思うが、環境に良くないものである。目に見えてはっきり症状が現れれば、合成洗剤はだめだ、石けんに替えようと思ってくださるが、ごく微量であるので、はっきりしたものは現れない。しかし、子どものアトピーや花粉症は、化学薬品が原因だということで、科学者の方も昔から言っておられる。洗濯機と一緒に粉石けんが普及するようになって、そのときからいろいろ問題視されてきている。高知でも、廃油を利用して石けんを作って、それを利用していただくというプロジェクトを作っていただきたいと思う。例えば、高知県でというのは難しいかもしれないが、高知市でということであれば、もう少し範囲が限定されると思うし、是非やっていただきたいと思う。知事さんにも是非その旗振りをお願いしたいと思う。なかなか難しい諸問題を抱えているので、石けんのことなどは手が回らないかもしれないが、これは高知県だけの狭い範囲のことではなくて、日本、世界も網羅するようなことである。今、中国で、化学薬品の汚染問題が起こっているが、垂れ流しにされると、自分の国だけでなくて、よその国にも影響が出てくる。高知でも、一致協力してプラントを作ってというような活動をお願いしたい。

知事：廃油の問題から、石けんを自分でお作りになろうというところ、そして、それを進められていることがすごいと思う。県でプラントを作って、全部を石けんに替えていくという壮大な構想について、今、旗振りをするということは難しく、まず産業振興や教育などに取り組んでいきたいと思う。ただ、確かに微量で気付かないがゆえに、影響が大きくなるというようなこともあるのかもしれない。申し訳ないが、中長期的な課題とさせていただきたいと思う。ただ、加戸知事がどういうことをやっておられるか、勉強させてもらいたいと思う。

（会場の方からのご意見等）

【県民からの意見提出、にぎわいづくり、無税の社会】

Kさん：住民は不公平に怒っているので、意見提出法というか、79 万県民の本音を、１回往復はがきで聞いてもらいたい。

　あと、どうしてもやってもらいたいのが、生活していて寂しい状況である。買い物に行こうがどこに行こうが知らない人ばかりである。いろいろな歌でも祭りでも何でもいいが、何か解決してほしい。

　そして、無税国家を目指してもらいたい。知事さんがお金の発行権を持てばよいと思う。

知事：意見提出については、法律にしなくても、今はメールやインターネットが使える。県庁のホームページから知事へのメールが出せるようになっていて、１日に 10 件、20 件来ることもある。全部に私が直接返事を書くことはできないが、読ませていただいて、勉強させていただ

くことで、全く変わってくるので、そういう仕組みを是非使っていただければと思う。
　祭りなどは大切にしたいと思うので、是非地域のお祭りなどをにぎやかにしていただければと思う。
　無税ということだと、例えば学校も維持できないということになるので、無理である。

【芳原まちづくり協議会の活動】

Ｌさん：芳原まちづくり協議会のＬといいます。我々は平成15年９月に芳原まちづくり協議会を立ち上げた。自分たちが住んでみたい地域をつくろうではないかということで、住んでみたい芳原、住んでよかった芳原を基本理念として、それから毎月２回、１回の休会もなくずっと続けている。その会には、前の地域支援企画員の田中さんや現在の有岡さんが出席してくださって、県のご支援にお礼を申し上げたいと思う。平成19年には、全国社会教育研究大会で芳原の活動が認められて、高松で発表した。また同年に、四万十市で行われた高知県公民館研究大会で発表をした。平成20年11月には、全国公民館研究集会が高知県であって、芳原の公民館活動を話して、非常に好評を得ている。我々のホームページも立ち上げて、７月以降3,100くらいのアクセスがある。資金がない中、高知市にも話したが、高知市もお金がないということで、ホームページにバナーを募集して運営資金を得ている。また、「春野　歴史の百景」という本を芳原まちづくり協議会で発行させていただいて、その資金も活動資金に充てている。資金がないからできないということではなく、自分たちでどうやったらできるのだろうと考え、できることからやるということが、まず第一ではないだろうかと思う。芳原まちづくりのホームページを見れば、芳原でどういう活動をしているかが分かるので、是非ご覧になっていただきたいと思う。

知事：バナー広告を募集されてホームページをつくり、3,100 のアクセスということで、素晴らしいと思う。いろいろな手段を考えて、あれがだめならこれでどうか、できることからやっていくということは素晴らしいし、大いに参考になる。私もホームページを見させていただく。また、地域支援企画員もかわいがっていただいてありがたいし、引き続きよろしくお願いしたい。春野地区では公民館の活動が元々非常に盛んだと伺っていたが、今のお話を伺って、平成15年９月から毎月２回で、１回も休みがないというのはすごいことだと思う。今後もご活躍をお祈りしたい。

【ウォーキングを活かした観光、県職員の対応】

Ｍさん：自然や歴史のガイドブック作りを通して、地域活性化を目指している。具体的に言うと、あまり知られていない無名峰の登山、鉄道廃線跡歩き、戦争遺跡巡りに加え、去年からは龍馬の脱藩道、これは往復300㎞を踏査して、解明されていない区間をすべて解明して、ガイドブックに著して、高知新聞さんなどにも取り上げていただいた。今日は、前橋本県政の終わりごろの県議会で、ある議員の方から、当時の橋本知事に質問したことを再度私が知事にもお聞きしたい。その議員の方は言ったことは次のようなことである。昨今、全国的に、メタボリックシンドローム対策や、健康志向、自然回帰志向の高まりから、ウォーキングがブームである。高知県には、世界に誇れるような雄大な自然がどこにでもあるかというと、そういうわけでも

なく、では、そういうところからどうやって観光振興にもっていけばいいのかというと、高知県の豊かな自然をウォーキングという形で巡ればどうだろうかと。高知県は、ウォーキング観光立県として宣言して、ウォーキングを観光に活かしていけばどうかというようなことを問いかけられた。しかし、橋本知事の答弁は、ごく大まかなもので、具体的に熱意を持ってどう取り組むというようなことは聞かれなかったと記憶している。旧春野町は、旧高知市との境に南嶺という素晴らしい山脈が横たわっている町で、ただ、人気にさせるには、何か目玉となるようなものがないといけないと思っている。昨今は長宗我部元親が全国の若い女性を中心に人気になっているが、その南嶺には元親が通った宇津野峠という峠があって、今でもきれいな形で峠道が残っている。その峠は当然稜線にあって、その稜線にはきれいな尾根道が続いている。その道には、旧春野町最高峰の烏帽子山などから縦走していくことができる。ところどころ春野平野が見渡せるし、春野平野の向こうには太平洋も広がっている。非常に景観がいいハイキングコース及びウォーキングコースになる。ただ、自然景観がいいからといって来てもらうというよりは、長宗我部元親と絡めて、現代のブームに乗るような形で県内外にアピールしていけばいいと思う。私のウォーキングに対する考え方は、主眼となるものをカテゴリー別にセレクトして、なおかつ多くの市町村を巻き込んでいくということである。主眼となるものは、例えば先ほどのケースで言うと長宗我部元親で、カテゴリー別というのは、史跡探訪を目玉とするのか、それとも観光名所として取り上げるのか、それとも健康ウォーキングとして広げていくのかなどである。その宇津野峠周辺だけではだめなので、近隣の市町村も巻き込んで、長宗我部元親遺跡として盛り上げていくということによって、かなり広がりを見せるのではないかと思う。ほかに、戦争遺跡では、高森山の塹壕などがあるが、これもやはりそこだけを取り上げては、絶対来てくれないので、高知市、南国市、須崎市、土佐市などが一体となって、戦跡観光資源協議会というものを立ち上げていただきたいと考えている。なぜ、戦跡を観光にするかというと、高知県は、米軍が沖縄の次に上陸を予定していた地であるので、高知県から戦跡を発信していくということは非常に意義がある。全国的に言うと、戦跡は近代文化財としての価値も見直されているし、さらには、関東、関西、上信越、九州では、テーマパーク的に取り上げて、年間来訪者 10 万人を突破するような戦跡もある。なので、観光資源として見直していったらどうかと考えている。

もう１点、県庁の職員教育についてだが、龍馬脱藩道の件で、観光振興課にいろいろと話をしたところ、どうも新聞を読まれていないようで、私の会のことなどを知らない。脱藩道を観光振興にと言っても、全く乗り気ではない。知事の手足となって動かないといけない課長クラスや係長クラスがそういうことではどうかなと思う。初対面であり、レジュメを作って、活動内容やこれまでの私どもの実績などを書いたものを提出したが、それも見ずに、まるで私を素人の市民団体程度にしか思っていなかった。本の内容についても、「高知大学に確かめてもらったら」だとか、脱藩道に関しては、「梼原町が盛んだから、そこに行ったら勉強になることも多いのではないか」という感じだったが、それは逆で、私はそういった自治体や市民団体に指導する立場である。もう少し謙虚な気持ちを持つべきではないか。

知事：ウォーキングだけで観光立県をするというほど高知県は小さくはなく、もっといろいろなことがある。ただし、ウォーキングも有力な武器であるのは、また間違いないと思う。「龍馬伝」

の話の中で、いかに龍馬に絡んだまち歩きのコースを作るかといった議論を盛んにしていて、昨日も市の観光協会さんからそういう提言が出たところだった。ウォーキングを観光にもつながっていく形にするとしたら、いかに物語のあるウォーキングコースを設定していくかということが肝の肝であろう。美しい景色を見ていくとか、健康別というようなことは、それぞれのグループの方でやっていただければいいことだと思うので、自分たちで、健康コースなどを作って是非やっていただければいいと思う。今、観光に求められているのは、観光の地産外商にも使える、県外の観光客の皆さんにも来ていただいて、楽しんでいただけるようなウォーキングコースである。高知市の周辺にもたくさんある。例えば、和霊神社などを組み込む形にするということもあるであろうし、確かに長宗我部元親が人気であるので、それを活かすもの、かつ、人にも知られていない新しい物語なども入ったりすると魅力的だと思う。安芸は岩崎弥太郎の系統のもの、北川も中岡慎太郎の系統の向学の道ウォーキングコースというものを作ろうとしている。

観光振興課の職員の件については大変失礼したが、各方面からいろいろなご提言をいただいていて、どう咀嚼してどう組み合わせていけばいいかということに、まだ苦しんでいるところなのだろうと思う。「龍馬伝」の実行協議会があって、そこにいろいろな企画を考える実行委員会のようなところがあるので、そこで１回、例えばこういうウォーキングコースがよいのではといったご提言をいただければと思う。今、ウォーキングコース作りに知恵がなくて悩んでいるところだと思うので。そういう場を１回こちらで用意したいと思う。

（知事のまとめ）

皆様、長時間誠にありがとうございました。いろいろと話をいただいた。それぞれの地域でどう地域おこしをしていくのか、環境問題、デコ芝居の話、お弁当の話もあった。さらに教育の問題について詰めたご議論もいただいたと思っている。いろいろな意味で、今、高知県は大変な状況ではあるが、産業振興計画の策定も行っているように、前に打って出て行こうというターニングポイントにきている。少なくとも県庁はそういうつもりで、これから仕事をしていきたいと思っている。産業の振興も、教育も、福祉もそうである。高知市さんは、今、特に厳しい財政状況の時期にきておられるので、ご苦労もおありかと思うが、高知市さんともよく連携をして、仕事をさせていただきたいと思っている。そのようにスピードを出せば出すほど、よくよくいろいろな方のお話を伺って、注意深く運営をしていかなければいけないという思いである。今日いただいたいろいろなご議論については、皆様方のプライバシーを侵さない範囲内で記録を作らせていただいて、関係部局で共有させていただく。それによって、今後の県政運営に活かさせていただきたいと考えている。

これからも頑張っていくので、今後もご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げる。